

One-off sessions

学術用語ミニシンポジウム | オンデマンド動画

多職種連携におけるコミュニケーション・ツールとしての用語の重要性

座長:真木 吉信(東京歯科大学名誉教授)

[MSY1-OP] 挨拶

[MSY-1] 多職種連携における歯科用語

○大神 浩一郎¹ (1. 東京歯科大学 千葉歯科医療センター)

[MSY-2] 用語の齟齬から規範的統合へ ―言語聴覚士の視点から―

○白波瀬 元道¹ (1. 医療法人社団永生会法人本部リハビリ統括管理部／永生病院リハビリテーション部)

[MSY-3] 多職種連携における共通言語としての「学術用語」を考える

○山田 律子¹ (1. 北海道医療大学看護福祉学部)

[MSY1-CL] 総括

学術用語ミニシンポジウム | オンデマンド動画

多職種連携におけるコミュニケーション・ツールとしての用語の重要性

座長: 眞木 吉信 (東京歯科大学名誉教授)

【略歴】

1978年 :

東京歯科大学卒業

1987-89年 :

Sweden Lund 大学歯学部口腔細菌学講座

1990年 :

東京歯科大学 口腔衛生学講座 助教授

2002年 :

東京歯科大学 衛生学講座 教授

2019年 :

東京歯科大学 名誉教授

[MSY1-OP] 挨拶

[MSY-1] 多職種連携における歯科用語

○大神 浩一郎¹ (1. 東京歯科大学 千葉歯科医療センター)

[MSY-2] 用語の齟齬から規範的統合へ — 言語聴覚士の視点から —

○白波瀬 元道¹ (1. 医療法人社団永生会法人本部リハビリ統括管理部／永生病院リハビリテーション部)

[MSY-3] 多職種連携における共通言語としての「学術用語」を考える

○山田 律子¹ (1. 北海道医療大学看護福祉学部)

[MSY1-CL] 総括

[MSY1-OP] 挨拶

[MSY-1] 多職種連携における歯科用語

○大神 浩一郎¹ (1. 東京歯科大学 千葉歯科医療センター)

【略歴】

1999年：

東京歯科大学卒業

2003年：

東京歯科大学大学院歯学研究科（歯科補綴(Ⅰ)学専攻）修了

2003年：

東京歯科大学歯科補綴学第一講座 助手

2012年：

東京歯科大学有床義歯補綴学講座 講師

2015年：

東京歯科大学老年歯科補綴学講座に講座名変更

2019年：

公益財団法人ライオン歯科衛生研究所東京デンタルクリニック院長

2020年：

東京歯科大学千葉歯科医療センター 講師

現在に至る

摂食・嚥下障害のリスクは、日常生活動作の低下に伴って増大するため、施設入所者や在宅患者に対する正しい栄養管理を行うのは重要である。そのための食支援において、歯科が医科、福祉との連携を進め「食事と栄養」を共通認識としたミールラウンドでは重要な役割を果たしている。また、口腔機能低下は認知症や全身的な疾患、あるいは運動機能、生活機能とも密接に関連していることのエビデンスが示され、口腔の健康保持の重要性は、医科においても共通の認識となっている。

近年、歯科の役割が重要視され、多職種と連携する場面がここ数年急増している。医師、看護師、管理栄養士との協働や、高齢者施設、歯科訪問診療での介護福祉士などとの協働が必須であり、重要なのが各領域で使用している専門用語が理解し、コミュニケーションをとることである。しかし、用語をめぐる関係者間の解釈が問題となることがある。

一例を挙げると、「口腔ケア」は口腔清掃を主とした口腔環境の改善を表す用語として一般によく用いられてきたが、医療職のなかでは、これに摂食嚥下などの口腔機能の回復や維持・増進をめざした行為すべてを含むものとして使用することもあり、定義づけることは容易でなかった。一方で、「口腔ケア」の用語は日本口腔ケア協会譲渡制限株式会社が権利者として商標登録していることも事実で（商標登録番号4568672）、学術用語として位置づけることに疑問があった。

このような状況から日本老年歯科医学会は日本歯科医学会の学術用語委員会とも連携をとり、「口腔ケア」は口腔環境と口腔機能の維持・改善を目的としたすべての行為をさす一般用語と位置づけた。学術用語としては、口腔清掃を含む口腔環境の改善など口腔衛生にかかわる行為を「口腔衛生管理」、口腔の機能の回復および維

持・増進にかかわる行為を「口腔機能管理」とし、この両者を含む行為は「口腔健康管理」と定義した。
本ミニシンポジウムでは、多職種との協働において歯科用語で齟齬が生じた例を紹介するとともに、歯科医療従事者に馴染みのない用語などについて私見を交えて紹介したい。

[MSY-2] 用語の齟齬から規範的統合へ ―言語聴覚士の視点から―

○白波瀬 元道¹ (1. 医療法人社団永生会法人本部リハビリ統括管理部／永生病院リハビリテーション部)

【略歴】

1998年：
大阪市立大学工学部生物応用化学科 卒業
2006年：
国立身体障害者リハビリテーションセンター学院 卒業
2006年：
医療法人社団永生会 永生病院 入職
2013年：
永生病院リハビリテーション部 主任
2016年：
永生病院リハビリテーション部 士長
日本言語聴覚士協会 理事
2018年：
日本言語聴覚士協会 常任理事
2019年：
永生会法人本部リハビリ統括管理部

高齢者の摂食嚥下障害は、様々な原因疾患から生じること、様々なステージがあること等からその対応は多岐にわたる。近年では老嚥という概念が生まれ予防の重要性もうたわれている。いずれにせよ、チームアプローチが求められる領域であるのは周知の事実である。

設立から24年の歴史がある日本摂食嚥下リハビリテーション学会は種々のマニュアルを作成しており、用語の齟齬に対して学会の見解を示す等、その領域の用語の共通理解に大いに貢献している。他の領域に目を移すと、比較的歴史が浅い領域では用語の齟齬が生じたとするものがあり、歴史の長い領域では用語の齟齬ではなく、用語をめぐる関係者間の解釈が問題となるとされていた。

演者の所属する永生会は八王子を中心に22施設を抱える医療法人で、言語聴覚士(以下、ST)が51名在籍し、医師や歯科医師の指示の下、摂食嚥下リハビリテーションを行うことが主要な業務の一つとなっている。永生会が事務局を担う八王子 STネットワークという任意団体(34施設113名)には、歯科を標榜している施設が6、歯科と協働している施設が18存在する。今回、その24施設の STにインタビューを行った。直近の1年間で使用する用語に齟齬が生じたことがあるか。あった場合その用語は何か。どのような状況だったか。について確認した。結果、病院等の施設では、大きな齟齬が生じたとの回答はなかった。これは、各施設に核となる医師や歯科医師等が存在し、勉強会やカンファレンスが行われており、用語やその解釈の共通理解が得られているために齟齬が生じていないと考えられた。一方、在宅領域では、齟齬があったとする意見が多く聞かれた。普段、顔を合わせることが少ない専門職同士のやり取り(SNS含む)で齟齬が生じやすいことが分かった。

一方、用語の解釈が統一されることによる好事例も経験した。シンポジウム当日には、八王子嚥下調整食研究会の取組みも紹介したい。

摂食嚥下障害への対応は、立場の異なる多職種、他事業所が関わることが多い。困難な症例であっても、思わぬ成果が上がることもしばしば経験する。用語の解釈の違いによる齟齬が生じることもあるが、それを恐れず積極的な関わりを持つことで、いわゆる規範的統合が図られ、対象者により良いサービスを提供できると考える。

[MSY-3] 多職種連携における共通言語としての「学術用語」を考える

○山田 律子¹ (1. 北海道医療大学看護福祉学部)

【略歴】

1990年：

千葉大学看護学部卒業

1992年：

東京大学大学院医学系研究科 修士課程修了，修士（保健学）

1992年：

札幌市中央保健所訪問指導員（副代表）

1993年：

医療法人溪仁会西円山病院（病棟主任看護師）

1996年：

北海道医療大学看護福祉学部助手（1998年講師，2004年准教授）

2002年：

北海道医療大学大学院看護福祉学研究科 博士課程修了，博士(看護学)

2004年：

米国ミネソタ大学大学院（看護学専攻・老年看護学）Visiting Scholar

2009年：

北海道医療大学看護福祉学部、同大学院看護福祉学研究科 教授（至 現在）

【資格・認定】

看護師、保健師、日本摂食・嚥下リハビリテーション学会認定士

【主な学会活動】

一般社団法人日本老年看護学会(理事)，一般社団法人日本認知症ケア学会(第16回大会・大会長[2015,札幌])，公益社団法人日本看護科学学会(代議員)，一般社団法人日本看護研究学会（評議員），一般社団法人日本摂食・嚥下リハビリテーション学会(第23回学術大会・副大会長[2017,幕張],評議員)，特定非営利活動法人日本咀嚼学会(評議員)，日本認知症予防学会（評議員），他

【主な受賞歴】

National Gerontological Nursing Association 18th Convention学会賞 (Judith V. Braun Clinical Research Award)ファイナリスト(2003)，学校法人東日本学園 理事長表彰（2010; 2016），第14回杉田玄白賞（小浜市,2015），他

【主な著書】

認知症の人への歯科治療ガイドライン（共著, 医歯薬出版, 2019）

歯科医院で認知症の患者さんに対応するための本：ガイドラインに基づいた理解・接遇・治療・ケア（共著, 医歯薬出版, 2019）

最新歯科衛生士教本用語集 ポケット版（共著, 医歯薬出版, 2019）

認知症ケア用語辞典（共著，ワールドプランニング, 2016）

生活機能からみた老年看護過程 第3版（編著，医学書院，2016）

認知症ケアガイドブック（共著, 照林社, 2016）

認知症の人の摂食障害:最短トラブルシューティング（共著, 医歯薬出版, 2014）

認知症の人の食事支援BOOK（単著, 中央法規, 2013）

看護大事典第2版（老年看護学責任編集, 医学書院, 2010）, 他

多職種連携を行う上では、共通言語としての「学術用語 academic term」による円滑なコミュニケーションが不可欠です。適切な「学術用語」が各専門職による卓越したアセスメントの視点を明確にして、さらに豊かな医療・福祉の提供に結びつくことがあります。

特に病院や施設に勤務する看護師は、患者や入居者の24時間の暮らしの営みを支援するため、2交代制または3交代制の勤務が通常です。交代によってケアが途切れないようにするには、「申し送り」や「看護記録」など「文字」によってケアを繋ぐ必要がありますが、一方で可能な限りの時間をベッドサイドケアに割くことが求められます。そこで、時間短縮のために「略語」が頻繁に用いられてきた経緯があるようです。また医師と同様に、好ましくない病状などを患者に悟られないための配慮から、いわゆる「専門用語（術語） technical term」が用いられています。

しかしながら、狭い専門性の中で使用されてきた用語は、アカデミックな活動を行う場合には、時に多職種間の円滑なコミュニケーションを妨げることがあります。患者や入居者等の方々に最善の医療・福祉を届けるためにも、今後、多職種連携を通して、専門性を超えた共通言語としての「学術用語」を厳選して、後世に残していくことが重要であろうと考えます。

例えば「摂食嚥下」という学術用語があります。摂食嚥下障害がある高齢者や、誤嚥性肺炎患者が増加する中、多職種による対応の機会も多くなっています。演者自身も、歯科医療関係者との実践や研究の中で、「咀嚼」の重要性に気づかされた経験があります。看護学分野においても、「摂食嚥下5期モデル」でいうところの「準備期」以降のアセスメントを行う際には「咀嚼・嚥下機能」という表現を用います。ヒトにとって味わいながらテクスチャーや香りを楽しみ、食べる喜びにもつながる「咀嚼」の視点はとても重要です。ところが、「摂食嚥下」として「咀嚼」という「用語」が抜けたことによって、咽頭期の安全性のみを重視する食形態が用意されてきた経緯があります。このように、使用する学術用語によって、医療・福祉の質にまで影響を及ぼすことがあるのです。

多職種連携が不可欠な今後の教育・研究・臨床のなかで、後世に伝えたい共通言語としての「学術用語」を見直す時期が到来したのではないのでしょうか。

[MSY1-CL] 総括